

ジャーナル戦国時代



小澤 岳昌

本年度より Analytical Sciences 誌の編集委員長を仰せつかりました。分析化学会の会員の皆様はもとより分析化学に携わる国内外の研究者が、新しい分析原理の発見や分析技術の開発・発展を世界に発信する場として、本誌は大切な役割を担っています。言うまでもなく原著論文を掲載する分析化学関連誌は、Analytical Chemistryをはじめ Analyst や Analytica Chimica Acta, また専門領域では J. Chromatography や Analytical Biochemistry 等、細分化された研究領域ごとに国際誌があり、さらに新興領域では新しい雑誌が乱立する時代になっています。こうしたジャーナル戦国時代の中で、Analytical Sciences は分析化学の総合誌としてそのプレゼンスを世界にアピールし、分析化学に関連する横断的学際領域をも取り込んでいかななくてはなりません。ジャーナルの影響力の指標となる impact factor (IF 値) は、Analytical Sciences 誌は 1.394 (2014, Thomson Reuters)にとどまっています。Analytical Chemistry の 5.636 や Analyst の 4.107 に較べれば決して高い数値ではありません。数値に踊らされることには危惧を感じますが、質の高い論文を掲載するための方策を唱道することは編集長としての務めでもあります。ではどのような改革が必要でしょうか。

第一に「正確なデータに裏付けられた影響力の高い論文」をいかに掲載するかが、Analytical Sciences 誌の学術的価値と質を向上させる原点にあると思っています。残念ながら投稿された論文が、そのままこのようなレベルにあることは極めて稀です。従って、査読コメントに基づいた絶対的判定を下すだけでは、本誌のプレゼンス向上は期待できません。そこで editor が見込みある論文を拾い、より良い論文に育て上げる地道な努力が必要であると感じています。実際トップジャーナルの多くは、editor とのやりとりを何度も繰り返すことにより、初稿原稿に比べ最終的には格段に優れた論文に仕上がって誌上にて公開されています。論文の速報性も重要であり相矛盾する強化策ではありますが、Analytical Sciences 誌の今後の長期的発展には必要なプロセスであると考えています。テクニカルにはこれまでも、journal のオープンアクセス化や特集号の強化など様々な取り組みが進められてきました。今後も、国外編集委員の増強や国際会議等における PR の実施、学会事務局や国際分析化学誌との連携による情報発信力の増強、より魅力あるホームページの改訂など、新たな強化策を提案し実装していく予定です。刊行 31 年目を迎えた Analytical Sciences をより魅力ある国際誌と育て上げていくために、会員の皆様からの知恵とアイデアを賜れますと幸いです。

〔Takeaki OZAWA, 東京大学大学院理学系研究科, 「Analytical Sciences」編集委員長〕